現代短歌分類辞典

第四十四巻

津端　修編纂

津端　修編纂

現代短歌分類辞典

第四十四巻

目次

	歌数	頁数
あり ①	四一	一
同 ②	三、一七二	四
計	三、二二三	

現代短歌分類辞典

44

昭和五十三年八月一日発行　定価一、六〇〇円

著者発行
兼印刷者　津端修

〒164
東京都中野区上高田二丁目九の一六
発行所　津端修

振替　東京　六七三四一番
電話　三八七局八四二九番

あり①【動詞】

モツアールト生家の二部屋暖炉あり幼童なりし彼の肖像あり④　斎藤茂吉

求めつつ天離り来てひらきたる国あり土あり思はざらめや⑧　松村英一

籾あり田つくりたうべ井筒あり井ほりのみけむ遠つ世人も⑨　佐佐木信綱

門前の朝の塵掃くかたはらを　顔しかめゆくあり　礼するもあり㉙　土岐善麿

野菜あり魚あり君を送るべくつどへる今を楽しくあらな③　吉田正俊

柳あり梅あり、句碑のもとによればおもかげに見ゆわが山人の⑫　佐佐木信綱

山のあり野の川あり川の流れあり千里の人を思ふ空のあり①　清水比庵

山畑の梅の林は咲きしあり咲きそめしありいまだ咲かぬあり①　清水比庵

病む妻あり病む嬰児あり勤終ればいぶせき家にまた帰るのみ①　生咲義郎

ゆきあひて吾に礼するもありせぬもあり関りもなく吾は老いづく⑥　松田常憲

雪ふかき街道すでに昏くなりて日かげる山あり日あたる山あり③　島木赤彦

あり

あり

行末をわづらひ思ふなこの父あり母あり死なじ力とならむ　宇都野　研

ゆくところ真実なれば緑なす山あり川ありなつかしきかも①　米田雄郎

夕雲のくらくなりたる頂に光たたへて沼あり池あり⑩　松村英一

夕立のかきくらす空あり虹の紅き空あり青々と晴れし空もあり④　吉植庄亮

夕焼けのくれなゐ深き空のあり秋のあはれをいふ手紙あり①　清水比庵

夜ごと現実とも夢ともつかぬ夢みつつ楽しきことあり哀しきことあり⑤　米田雄郎

世とともに神あり聖書云ふ神が牧師について世の隅にあり　津端　修

世に地位あり学あり金あるもののつとめそれを思ふか君は旅にして①　三井甲之

世に男女ありをとめあり然ゆゑにかくも和むか酒のはずむか⑥　岡野直七郎

世のすゑにかかる恋あり歌もありつよき三人を東に生みぬ⑤　與謝野　寛

世の中は春のみ園に春雨に流るる花ありふふむ花あり①　蕨　橿堂

夜ふけぞら仰げるわれに白雲のはなやぐ夜ありさびしき夜あり④　横田専一

読みあはす一首一首に若きあり老いたるもあり心のなげき⑮　松村英一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

読みあはす一首一首に若きあり老いたるもあり心のなげき⑮　松村英一

四方にして見送りの歓呼終日(ひとひ)あり空耳のごと遥けきものあり㊂　桑山良

世をおもふ心はひとつ太刀なでて泣く友もあり笑む友もあり②　與謝野寛

夜をこめて汽車にて来たりそのままに山に向ふありここに立寄るもあり㊀　半田良平

労働に生くる人ありその故に食ふひとのあり歌と歌の論②　臼井大翼

流水のごとき声あり月光のごとき影あり雲林の画は①　岡崎義恵

隣室に畳藁鳴らすあり糸しごく音あり旅にさめつつきけば③　生方たつゑ

煉炭の火はおとろへて炎紅き孔(こう)ありすでに黒き孔あり　山口茂吉

黄河越えて南するあり西するあり揚子江より北する軍(ぐん)あり⑭　川田順

わが家に父あり母あり摺臼の音をききながら悲しく思ふ①　加藤淘綾

わがかしぐ米を食ぶる夫ありともにわけあふかたじけなさよ④　長沢美津

わが病むに赤あり黄あり紫の花くさぐさのダリア盛れり②　松本常太郎

あり

あり

吾ながら同じ人とは思はれず髷結ひしあり笠きたるあり①　正岡子規

われにいま山小屋風の書斎あり杜詩詳註あり残生もあり㉒　土岐善麿

吾になすべき仕事あり才能あり興奮して夜夜眠らぬに力衰へず②　斎藤喜博

吾よりも老いたるがあり若きがありこのひた土に斃れたりしか⑦　松田常憲

われらどち励みあひつつ命をはりしものあり生きて老ゆるものあり⑪　斎藤茂吉

をさな児を胸に抱きてくる女婦(ぢよふ)もあり少年少女の一隊もあり④　斎藤茂吉

あり②【動詞】

結句止として「あり」のある歌

愛弟子細香去りてさびさびし胸憶(おもひ)を遣(や)るはただ酒にあり③　岡本大無

あかあかと騒ぎ廻りそ人力車夕日に坐り泣く男あり①　北原白秋

あかあかと日暮るる空の風焼に吹き流されてゆく鴉あり④　太田水穂

あかあかと夕日曇れる八月のちまたを行きて心閑あり①　大橋松平

赤々とわたるあらしに船原の峠を孤り下るひとあり②　鹿児島　壽蔵

赤蟻の行き交ふみればかなしくも卯喰(うは)へてゆく蟻もあり②　久保田　不二子

赤き上衣目に立つ蒙古棹とりて箱船は今中流にあり　土屋　文明

赤き玉とる子もなくてほほづきば今年の秋も棄てられてあり③　九條　武子

赤き微粒飲みて優しく衰ふるをみなが引ける眉固くあり③　清水　恒子

赤き実が山土泥にまみれ落つ古木の枝に残る実もあり④　高田　浪吉

赤き道来(きた)れば原の草を薙ぎはやくしほれし一区劃あり⑪　松村　英一

赤き水海に注ぎ入る川口は組みし筏にふたがれてあり④　石榑　千亦

紅き果を青き木の葉に売り居るはとどこほる心にひびくものあり④　吉植　庄亮

朱き実を見付けひよどり二つも三つも飛び廻りけりわが家にもあり①　清水　比庵

あかくあかく躑躅の類の咲きにける芝生つたひてくる笑ひあり㊂　中村　十鏡

赤錆びし鉄片に似てぶなの葉のかさなり沈む二池があり⑤　生方　たつゑ

あり

あり

アカシヤの瑞葉そよめく朝ぞらに昨夜をてりたる月白くあり②　相良義重

暁の池は氷にとぢられてをし鳥二つ岩の上にあり①　正岡子規

あかつきの水上を這ふ靄かなしかなしめる子等船の上にあり①　森園天涙

あかつきのつゆふかき野の草低くしきりに飛び立つ黒き蝶あり　大河内由芙

あかつきの寝覚めわびしく猶ほ生きてわれありけりと思ふことあり　宇都野研

暁の薄明を行けばかつて吾れ中支を行きし錯覚があり㊃　林新一郎

暁の光しらじらさせる頃旗振りて出づる輜重隊あり㊂　渡辺直巳

暁の光をほそく入れしめし窓にむかひてまひくる蚊あり②　村田利明

あかつきは　小学校の窓ガラス　いみじき玻璃にかはれるもあり①　宮沢賢治

あかつきをひさしく覚めて涙うかぶ友の誰よりもわれは幸あり　柴生田稔

赤土の起き伏す丘の二里あまり古墳千三百六十八あり①　平福百穂

赤土の工場敷地ひろびろと陽は照りかへるその中にあり①　藤森朋夫

あかときのいまだ暗きに眼ざめたる我より先に啼く鳥のあり③　杉浦翠子

あかときの海に消がたき水脈みれば嘆かじとすれど迫る思あり㊇　井上助太郎

あかときの四時に鐘して起きいづる山寺のそらや星ちかくあり④　中村憲吉

あかときを霎雨(こさめ)か零りし草履はきたどる山みち土ぬれてあり③　岡本大無

あがなひし岩波文庫が外套の衣嚢(かくし)の中にきのふもけふもあり①　堀内通孝

垢にまみれ臭気も立たむうつし身に清く流るるいのちなほしあり⑤　吉野秀雄

あかね雲輝く下の高槻に木ごもり深く動く鳥あり①　池原楢雄

赤の牛乗せ来る舟のひとうから夕風沼の広みにとあり　北原白秋

闕迦の水石の窪みに溜りゐて澄み透る中に遊ぶ虫あり④　若林牧春

赤旗をまるめて帰る学生のしはがれごゑに静けさのあり⑦　長谷川銀作

赤彦が邦子に宛てし手簡(ふみ)読めばおごそかにして匂ふものあり④　吉野秀雄

灯消すこの夜の空の低まり来て木木の若葉を光らす雲あり　木俣修

あり

あり

あがり来し蟻をたたみに殺しつつたのめなき人にゆく思ひあり①　桐田蕗村

灯つくまへのをぐらきひとときにまどろむらしきをりをりがあり②　村田利明

障子戸にうごく松影月の夜風にも消えんあやふさにあり①　米倉久子

あかりの輪卓上に落ち葡萄酒のびんとインクと巻貝とあり①　三木アヤ

明るき利根の川原帆をかけて渡し舟の今は向ふ岸にあり②　斎藤喜博

あかるく雨が降りくる牡丹園なにかいそがしく見てゆく人あり①　野村清

秋いまだ暑さをのこす片山の木群がなかに鳴く蝉のあり④　太田水穂

秋風に心そそられあたふたと出づれば空に白き雲あり　金子薫園

秋口の曇りわびしき庭木よりはげしく蝉をとりゆく禽あり㈥　庄司正史

秋雲の斑に影しゆく涯に枯れて平かに霧ケ峰あり②　加藤淘綾

秋雨のおとろへゆきてをりをりに光黄いろく明るときあり④　生方たつゑ

秋雨のはれし峠に日は暑く馬糞を嘗むる黒き虫あり③　結城哀草果

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

秋ぞ来と紅うつくしく耀ける林檎が二つ夜の卓にあり②　塚田菁紀

空樽に水汲み溜めて梅が枝をここだく挿せり咲きたるもあり④　半田良平

秋づきし日光射しこむ研ぎ水に鋼泥の濁り澄みつつぞあり⑥　若林牧春

秋づくといへば光もしづかにて胡麻のこぼるるひそけさにあり⑯　斎藤茂吉

秋霖雨の夜更ふりしきる音聴けば響きはしじに交りつつあり　若林牧春

秋に入る雨つよくして降り深むその音聞けば夜の寒さあり⑧　宮柊二

秋の雨さむさを誘ふ山のま夜宿にちかづきてくる灯かげあり④　生方たつゑ

秋のあめ外暮れがたみ行く人の傘のうへにはまだ明りあり③　中村憲吉

秋の来て庭の白萩咲き出でぬ衰へぬれどわれ命あり⑮　窪田空穂

秋の野をななめ夕照り百に千に鳴きけむ虫がなほ耳にあり　伊藤左千夫

秋の日のくもりにつづく桑畑畝間に見えて青き菜のあり　林圭子

秋の日のふかまり行くに赤き実も紫の実も黄ばむ実もあり④　岡麓

あり

あり

秋の日の路ゆき何かもの悲し過ぎし日思ひ出づることあり④　金子不泣

秋の日ははやく傾き佐良山の嶺にきはだちならぶ松あり①　上代皓三

秋の夜のうすら寒きに湖の辺の藻臭き温泉(ゆ)に浴(ゆあ)みつつあり①　森山汀川

秋は朝さやかに晴れて大阿蘇の稜線さむく立つ風のあり㉔　森高徳次郎

秋は朝繃帯換ふる足にとどく陽の明るさよ癒えにつつあり㉖　小見山和夫

秋は雲高く流るる吾が視野にふと現れて消えし鳥あり㉓　平尾一葉

秋ははや白き木槿咲く籬にしめらひもちて昏るる道あり㉖　庄司正史

秋はやき山にひびきていくすぢも瀬が集ひ合ふ一ところあり④　生方たつゑ

秋冷えの宵より降りとなりし戸に翔ばたきながら落つる虫あり　立岩茂

秋陽射し今朝は和らぐ裏街に番(つがひ)の兎遊ばす児あり㉕　大西とき子

秋日射紫苑に蝶はとまりゐて片貝の光たもちつつあり⑩　北原白秋

秋日向思堪へゐる我が体に気先すさまじく響くものあり⑩　北原白秋

秋深きここのみ山に風こもりそこはかとなくせまる音あり㊽　森路匁平

秋ふかき月の夜空にいにしへも飛び失せなばといひしをみなあり③　谷鼎

秋ふかき母が墓べは明るくて遠き人音のいや遠くあり①　金子信三郎

秋ふかみ衰へしるき朝顔のこの葉を食みて生くる虫あり①　加納小郭家

秋真昼もはらに人が落しゐる硬き瓜李（くわりん）の音近くあり㊀㊁　中村十鏡

秋山にはやも移ろふ陽のありど笹竹は清にさやぎつつあり㊀㊅　梅川秋彦

秋ゆふべ灯す茶亭の壁にして東亜共栄圏確立といふポスターはあり㊀㊅　吉田恵弘

秋らしき夜空とおもふ目のまへを光はなちて行く蛍あり③　斎藤茂吉

あきらめて国へ帰れば思はむや妻子はそこにまさきくてあり①　森山汀川

諦めのはてにしたしむ沈黙か寒の卵とわれと今夜あり②　千代国一

悪尉（あくじょう）に似しこの面の眉きびし見つつ心に触るるものあり㉕　吉井勇

芥を焼き下肥を汲み終りたる日曜の午後に歌の会あり②　隅田葉吉

あり

あり

あくまでも霜はいたりぬこの柿や果のつけぎはに黝きしみあり⑩　北原白秋

あけがたの食堂の窓　そらしろく　はるかに行ける鳥のむれあり①　宮沢賢治

あけがたの林に入ればかそかにも梢ふれゆく霧のおとあり㈡　竜田杏邨

明け暮れに見なれし人のいまさずて白き帽子の壁にかけあり㈦　前沢綾女

あけぐれの道あゆみきて上りたる部屋に聞こえて遠き風あり④　宮柊二

明けそむるみ山に響きほととぎすしき鳴けばかへりくる想ひあり　岩上とわ子

明け近き空の下びに開きたるわが掌に触るるものあり⑰　前田夕暮

上げてくる潮かすかに光りつつ胸圧して迫りくるもののあり①　岩上とわ子

あけはなつ縁さき近く縫ひをれば紅絹（もみ）裏返しゆく風のあり　蔵田視代子

暁早み二階より見ればわが門の湿れる地に下りゐる鳥のあり①　岡本大無

あけぼのの静なるみちを来し時にめざめし時計鳴れる家あり㈦　福島孝一

あけぼのの諏訪の湖とりめぐり白壁あまたかがやいてあり①　今井邦子

憧れてゆくわが足を引き据ゑて我を包む温き平安があり①　岩上とわ子

朝明けていまだ日ささぬ崖の膚長(た)けし竹煮草の花に風あり③　広野三郎

朝明けてまだ日の照らぬ海しづか潮ひきしあとの石ぬれてあり①　中村美穂

朝明けてまだ街くらし一台の電車のはしる音のしてあり①　中村美穂

朝明けてみ空しづけし蓮葉にたまれる水にうつる影あり　藤沢古実

朝明けに空見廻はせば煉瓦壁涼しきまでに撃ちぬかれあり㊂　十川良輝

朝明けに鳴く小綬雞か秋月に目ざめて心清(すが)しきものあり⑥　花田比露思

朝明の雲ひくくゐる嶺の上かぼそき噴煙(けむり)まじりつつあり①　鈴江幸太郎

あさあけの男体山は紺のいろふかくふくみて目に近くあり⑥　鹿児島壽蔵

朝あけを庭うすらなる白雪に戒壇院は扉をあけてあり③　松田常憲

朝あさの電車の窓に眺めゆくみ濠に鴨のをらぬ日もあり①　竹尾忠吉

朝あさの目ざめごころに見るものか吾子の骨壷小さくしあり　大道寺吉次

あり

あり

朝々を厠にかよふ縁ばたのつはぶき乱れ雪の下にあり⑤　松村英一

朝いまだ夜のいろのこる山かけて桜咲く日を長岡にあり㊃　馬場静浪

朝遅くおこすこんろの火の中に貧しき一人の日曜があり　江原文鳥

朝光に眠りています母の顔おとろへはてて清らけくあり①　山下陸奥

朝川に手水する吾れの真向ひゆ陽は靄中に白白とあり①　中沢庭柯

朝川のこのしづけさよ動くものうごくともなき浮標ひとつあり㊂　後藤秀治

朝川の底ひにありて洋皿の反射をよぎる魚のかげあり②　桐田蕗村

朝顔の顆を挽ぎながらこのあたりに咲きたる花の記憶なほあり⑦　若林牧春

朝きほふ火むらを観れば冬すでに霜立ち粗き河洲にてあり㊄　横手貴志

朝きよき小路に憩ふつかの間を幽かに動く漆の葉があり㊅　大友和義

朝ぎらひ雨あがりぎは笠かぶり田におりて苗を見る人のあり⑤　岡麓

朝霧のこの往還をゆく牛の曳ける車に霜置きてあり①　高橋希人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com